ル語・オランダ語の植物用語も学び取り，その蘭山の用語を宇田川榕菴は『植物啓原』に用い，飯沼慾斎は『草木図説』で図は『花彙』を，解説は『啓蒙』を学んだとした．竹中梨紗氏は，ロシアのマクシモーヴィッチに蘭山の著書が贈られたことを述べる．

巻末の資料編は，磯野直秀氏の「蘭山の足跡」はじめ書簡集，門人録，著作一覧，年譜，系図など充実した労作が揃う．いずれもこれからの蘭山・本草・博物誌・科学史研究に欠かせないものとなろう．

「日に新たに」実物から，東西の書物から最晩年まで学び続け，いつ入浴し，寝るのかも分からなかったというほど研究に没頭し，真実の姿を求めていった研究学徒・蘭山の姿が，この書から浮かび上がる．もとより人間は時代や地域の限界の中でしか生きられない．しかしその姿勢は時代を超えて活き，後継者たちに受け継がれ，業績は海外にまで影響を及ぼしていた．そのことにしずかに大きな感動を覚える．

（岩間眞知子）

［八坂書房，〒101-0064 東京都千代田区猿楽町1-4-11，TEL. 03（3293）7975，2010年7月，A5判，648頁，12,000円＋税］

家本誠一 著
『黄帝内経素問訳注』・『黄帝内経霊枢訳注』

『黄帝内経素問』（略して『素問』）と『黄帝内経霊枢』（略して『霊枢』）は，①古代漢語で書かれている，②古代の医学書である，③鍼灸医学が中心である，④古代の中国思想の影響をうけている，などの特徴を挙げることができる．つまり，『素問』・『霊枢』を注釈するには，①～④の教養が欠かせないのである．畢竟は，中国文学と東洋思想を専攻し，近代医学および漢方・鍼灸を学んだ者でなければ，『素問』・『霊枢』の注釈という大業はなし得ないといえる．望むらくは，より高い知識とより深い臨床経験があるならば，さらに真に迫ることができるだろう．

小川環樹らは，『史記列伝』の「はじめに」（第1冊，岩波文庫）で，「ただ七十巻のうち第四十五の扁鵲倉公列伝と第六十八の亀策列伝のみを省略した．前者は医学の記述，後者は亀卜の方法について，私どもの訳者の学力甚だ浅く，正確に訳しうる自信がないからである」と述べているのが，何よりの証拠である．

著者は，まさに適任者である．医師であり，その上に漢方や鍼灸も研鑽されているし，古代漢語の勉強は，48歳（昭和46年）から始め，40年近くのキャリアをお持ちである．

近50年の『素問』と『霊枢』の注釈作業には次のものがある．

① 丸山昌朗著『校勘和訓黄帝素問』『校勘和訓黄帝鍼経』
② 柴崎保三著『黄帝内経素問新義解』
③ 宮沢正順著『素問・霊枢』
④ 小曽戸丈夫・浜田善利著『意釈黄帝内経素問』・『意釈黄帝内経霊枢』
⑤ 南京中医学院編・石田秀実監訳『現代語訳黄帝内経素問』・『現代語訳黄帝内経霊枢』

この度の『黄帝内経素問訳注』・『黄帝内経霊枢訳注』はこれらに続くものであるが，近代医学の視点と，長年の臨床経験を踏まえて読み解いたことに注目すべきである．今までの注釈で最も足りなかったところである．

その成果は，本書の「素問概説」・「霊枢概説」（共に第1巻にあり）に要約されている．古代医書としての全体像から，医学概論，各論，専門用語までをていねいに解説している．これはすみずみまで読み切った人しか書けない貴重な部分である．たとえば，「経脈は血管神経複合体である」，

「風はウイルス，寒は細菌，風寒で溶連菌感染症，湿はアレルギー性機転とよみかえると，（痺は）アレルギー性疾患，リウマチ熱の発生病理」だといい，あるいは逆調論篇の「四肢熱」は肢端紅痛症であり，「肉苛者」は椎体外路症候群だと同定しているところなどは，著者ならでは卓見である．

ふたつの「概説」の発展版が，『漢方の臨床』に連載されている（第57巻・第5号から，2010年）ので，併読されたい．

5月号　漢代の医学　その1　『漢書』藝文志・方技略
6月号　漢代の医学　その2　陰陽五行三才
7月号　漢代の医学　その3　解剖学
8月号　漢代の医学　その4　生理学
9月号　漢代の医学　その5　生理学（2）
10月号　漢代の医学　その6　病因論
11月号　漢代の医学　その7　病理学（1）

『素問』第3巻には，「素霊研究」と「運気概説」の2本の論考が付録されている．前者には，「気の医学――『素問』・『霊枢』に現れた気の研究」，「『素問』の医師たち」，「肉苛なる者」が収められ，後者には「『素問』の生気象学」，「運気論」が収められている．本書には運気7篇の訳注は備わっていないが，付録によって運気論の大概を知り得る．また「気」はこの医学の最重要語なので，「気の医学――『素問』・『霊枢』に現れた気の研究」という論考は，まさに核心をついている．

（宮川　浩也）

［医道の日本社，〒237-0068 神奈川県横須賀市追浜本町1-105，TEL. 046（865）2161，『黄帝内経素問訳注』，B5判，各巻5,500円＋税．第1巻，2009年2月，564頁．第2巻，2009年3月，531頁．第3巻，2009年4月，576頁．『黄 帝内経霊枢訳注』，B5判，各巻5,500円＋税．第1巻，2008年4月，463頁．第2巻，2008年4月，461頁．第3巻，2008年5月，456頁．］

橋本　明 編著
『治療の場所と精神医療史』

本書の方向性は，橋本による「はしがき」中のつぎの一節がよくしめしている，――

本書が提唱している「治療の場所」の「場所」とは，…〔中略〕…その土地とそこに住む人々の生活や記憶が時間をかけて結びついた「かけがえのない場所」のことである．近代日本の精神医療史を振り返ったとき，それは精神障害者を「場所」から「空間」へと追い立てる歴史だったのではなかろうか．すなわち，医療の西欧近代化が進めば進むほど，神社仏閣，滝場，温泉，宿屋などの自然・社会環境と治療・看護行為とが密接に結びついた「場所」から，私宅監置室や病院・施設といった家族関係や地域社会から閉ざされ，切り離された均質な「空間」へと，患者処遇の舞台がシフトしていったのである．これは明治以来の医療の西欧近代化に根ざした方向ではあったが，同時に施設［＝「空間」］収容の拡大はさまざまな弊害を生みだすことになった．

ここにいう「場所」はplaceに，「空間」はspaceにあたる．

橋本を中心とする近代日本精神医療史研究会は2004年から，各地の「治療の場所」を調査してきた．その成果の一部分が本書である．

第1章「精神医療における場所の歴史 「そこにしかない」場所と「どこにでもある」場所」で橋本は，かれが長年調査してきたゲール（ベルギー）からはじめて，ヨーロッパの精神科医療史（家庭的看護をふくむ），そして日本のそれを，上記引用の立場から概観している．日本に近代精神医学を導入した呉秀三は「治療の場所」についてもっとも多くの記録をのこしており，橋本らの調